

手術説明書～胆嚢摘出術

肝臓で作られる消化液の一つである胆汁は、胆管を通過して十二指腸へと流れていきます。また、胆管の途中には胆汁を貯蔵する働きを持つ胆嚢があります。胆嚢は、切除してもほとんどの方は食事制限の必要もなく、日常生活も手術前と全く変わりなく過ごすことができます。

胆石症は10人に1人という頻度で認められる、比較的多い疾患です。そのうち、症状のある胆石症や急性胆嚢炎に対しては、胆嚢摘出術という手術治療が推奨されています。また、胆のう腺筋症、胆のうポリープなどの良性疾患に対しても、胆嚢摘出術を行う場合があります。

胆のうがんについて：腹腔鏡下胆のう摘出術の適応となるのは、深達度（がんがどれだけ胆のうの壁のなかを深く進んでいるか）がごく浅い、早期のものに限られます。早期の胆のうがんかどうか見分けがつきにくい場合には、手術でとった胆のうを顕微鏡で検査し、早期でないものに対してのみ後日に手術を追加する、ということもあります。また、胆石症や胆嚢炎に対して手術を行ったときに、偶然、がんが発見されることもあります。

胆嚢摘出術について

多くの場合、腹腔鏡下胆嚢摘出術を行います。腹腔鏡下胆嚢摘出術とは、腹部に3～4ヶ所の穴をあけ、その穴から内視鏡カメラや手術の器具を挿入し、テレビモニターでお腹の中を観察しながら胆嚢を摘出する方法です。腹腔鏡手術のなかでは、一般的にひろくおこなわれている手術であり、安全に行える手術です。ただし、腹腔鏡下手術は従来の開腹手術にくらべ視野が悪く、手術操作も制限されるため高度な技術を要します。手術による身体への負担が軽いため手術後は開腹手術よりも楽な場合が多いですが、決して簡単な手術ではありません。また、この手術特有の合併症があることも理解しておく必要があります。胆嚢の炎症が強すぎたり、腹部の手術の後などで癒着が強い場合などでは、腹腔鏡手術が向かない場合もあります。

腹腔鏡下胆のう摘出術に特有な合併症は以下の通りです。

1. 出血：

胆のうの周りの動脈、静脈の損傷の結果起こります。腹腔鏡での止血が困難であれば開腹手術に切り替えます。創から術後に出血することもあります。

2. 胆道損傷：

胆のう炎のあとなどで癒着がひどい場合などに誤って胆管を傷つけてしまうことがあります。腹腔鏡で修復可能な場合もありますが、原則的には開腹手術に切り替え、損傷部を修復します。

3. 胆汁漏出：

手術後に肝臓と接していた部位などから胆汁がもれ、ドレーンから排出されることがあります。通常数日間でおさまりますが、胆汁のもれが長期にわたり続くようであれば処置が必要になります。

4. 胆管への落石：

胆のうの結石が小さい場合など、胆管に結石が落ちてしまい、しばらく後に胆管結石として黄疸や腹痛などの症状がでてくることがあります。一般的には内視鏡で石をとることができますがそれができない場合は胆管結石症に対する手術が必要になります。

5. 創の感染、ヘルニア：

創の化膿を防ぐために操作器具や摘出臓器が直接創に接しないような特殊な器具や回収袋を使用しています。また、術後しばらくして創のところに腸などが入り込んでしまうことがあり、これをヘルニアといいます。

開腹手術への移行について

以前の腹腔内手術や腹腔内の炎症の影響で癒着が認められる場合や出血があり止血が難しい場合には腹腔鏡下手術を続けると危険性が高くなります。このような場合、開腹手術に切り替えることがあります。

腹腔鏡下手術の合併症

おなかを炭酸ガスでふくらませて手術を行うために起こりうる特有の合併症があります。

1. 下肢静脈血栓症、肺塞栓症：

足の静脈に血栓（血液のかたまり）ができることを下肢静脈血栓症、また、血栓が肺にとんで、肺の血管につまることを肺塞栓症といいます。肺塞栓症は致命的な場合がありますが、その発生頻度は0.1%程度とされています。当院では、予防ガイドラインに則って、予防に努めています。

2. 高炭酸ガス血症：

血液中の炭酸ガスの濃度が高くなることがあります。そのため、手術中に不整脈を起こすことがあります。その対策として、呼気中や血液中の炭酸ガス濃度をみながら手術を行います。また、極めてまれですが、血液中に炭酸ガスが入り込んでガス塞栓を起こす場合があります。

3. 心臓、肺への負荷：

腹腔内圧、気道内圧が上昇し、循環血液量が減少するため、心臓や肺に負担がかかります。術前検査で心肺機能に異常がないかチェックし、手術中は腹腔内圧、気道内圧を測定しながら手術を行います。

4. 術後肩痛：

手術を受けた方の 3 割程度に起こりますが、軽度で数日で消失することが多いです。

入院期間は、通常 2～3 日程度です。患者様の経過にあわせて調整いたします。退院後は、外来で診察をさせていただくと同時に、病理結果（摘出した胆嚢を顕微鏡で検査した結果）をご説明いたします。

ご不明な点がありましたら、担当医まで、お問い合わせください。

社会医療法人ペガサス
馬場記念病院 外科

